

「2025年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学大学院教育学研究科 修士1年 上嶋美紀

大学院に進学してから、自身の研究を対外的に発表する初めての機会でした。これまでゼミや勉強会において研究を報告する経験はありましたが、海外の社会学者や同世代の学生を前に、しかも英語で発表するという機会は初めてで、私にとって大きな挑戦となりました。発表準備で最も時間を要したのは、専門用語や研究の前提知識をわかりやすく伝えるための工夫です。私の発表は日本固有の制度や社会的背景に関する理解が前提となる部分が多く、こうした点をいかに説明するかが課題でした。特に、専門的な概念を正確かつ簡潔な英語に翻訳することは難しく、とても苦労しました。夏休み明けに控える国内学会と並行して準備を進めていましたが、言語以外にも求められる議論の深度や発表スタイルなど異なる点が多く、それぞれに固有の難しさがあることを実感しました。

発表当日は、各大学の学生や教授陣を前に、緊張感に包まれました。発表自体は事前の練習の成果もあり、未熟ながらも大きな問題なく終えることができたと感じています。しかし、質疑応答では自身の英語力や対応力の不足を痛感しました。質問の意図は理解でき、頭の中では日本語で回答が浮かんでいるにもかかわらず、それを即座に適切な英語で表現できず、言葉を詰まらせてしまう場面もありました。今後も海外に渡航し、英語で話す機会があるので、そこで英語力を改善していくたいと思います。

一方、聴衆としては、3カ国による多様な研究に触れる刺激的な機会になりました。ジェンダー、政治、都市など多岐にわたるテーマを、社会学的視点から分析した発表を聞くことができました。教育社会学を専門とする私にとって、異なる視点や方法論に触れるることは貴重な学びとなりました。各国の社会学専攻の学生がどのような問題意識を持ち、どのように研究を進めているかを知ることは、自身の研究における新たな可能性を模索する上でも非常に大きなモチベーションになったと感じています。

さらに、フィールドトリップでは、台湾の歴史や政治について深く学ぶことが出来ました。これまで漠然と知っていた歴史的出来事が、単なる過去の出来事ではなく、現在を生きる人々のアイデンティティと深く結びついていることを肌で感じることができました。そしてホスト校である台湾大学の学生の皆さんには、滞在中を通して大変お世話になりました。心より感謝しています。

今回台湾で各国の社会学専攻生と交流し、多様な視点を得られたことは、私にとってかけがえのない財産になったと感じています。この経験を今後の研究に役立てられるよう、より一層努力していきます。